

『たった一ひとつだけの消けしゴム』

作者 浅羽 一

手首を横切る線の数を数えてみた。こんな時まで数字が気になるなんて、自分の脳みそはよっぽど毒されているんだと、気付けば笑みまで浮かんできた。人生で最期の表情が笑顔だなんて、何て皮肉の効いた話だろうか。今の私じゃ、この前に笑ったのはいつだったのか、記憶を掘り返すことだけでさえも億劫なのに。

湯を張った浴槽に服を着たまま肩まで浸かりながら、ぼんやりと天井を見上げてみる。まだ正午を回ったばかりなのに灯りを付けたくないし薄暗い浴室は、湿気の感じも相まって陰鬱な自分の部屋とそっくりで、不思議と恐怖心を抱きはしなかった。胸に満ちているのはただ、気怠い諦観だけだ。

遺書が残していなかった。実を言えば、それぞれ仕事とパートに出掛けている両親が、疲れて帰ってきた時、何の心の準備もなく変わり果てた娘の姿を目にするのだろうと考えたら、やはりキッチンのテーブルの上に簡単でも良いから一筆書いておくべきなのかとも思っただけで、結局はしなかった。面倒だったと言うよりも、単純に何を書けばいいのか分からなかったからだ。

〈お父さん、お母さん、今までありがとうございました〉

ただでさえ毎日部屋に引きこもって過ごしていたのに、挙げ句の果てにそんな言葉を並べながらほとんど思い付き同然に死ぬなんて矛盾は、残酷どころかいつそ滑稽な置き土産にしか思えなかった。

目の前に掲げていた左手を、いい加減にしんどくなって湯の中に落とす。半袖のTシャツから伸びる細い腕は浮力など無視して勢いよく底まで沈み、肌垂れに垂れていた幾つもの筋はあつという間に細かな塵のようになって紛れてしまった。だけど、それでもまだ少しづつ新しい血が流れ出ている事は分かった。光の下ならきつと鮮やかであろう色は、しかし変に褪せて灰色みたいだった。

しばらく、じっとしていた。体はやけに重たくて、本当に身じろぎするだけでも相当の気力を要するほどだった。

一瞬、このまま目を閉じて、眠ってしまえば、何もわざわざ自ら体を傷つけたりしなくても自然に溺れて死ぬるんじゃないかと思った。

だから私は、目を瞑った。どうしてなのか、瞼は下ろす方により力を必要とした。

結果的に、私は再び目を開けた。一向に眠れる感じがしなかったからだ。このまま、じつとりとした闇の中でいつ訪れるかも定かでない睡魔を待つくらいなら、さっさと瞼を持ち上げて右手の剃刀を使った方が遙かに容易く、また気楽そうだった。

体にまとわりつく水の感触はいやに粘つくくて、その抵抗を振り払いながら両腕を水面ぎりぎりの位置へと持ち上げるまでの間に、深い呼吸を三回もした。

改めて、自分の左手首を見た。平行ではなく、ばらばらに角度のついている幾つもの傷は、やはり薄い皮膚の下を露わにしていたけれど、血はもう止まっていた。

我知らず右手が震えそうになって、無理矢理に胸を膨らませるように大きく息を吸った。そして私は限界まで肺に空気を取り込むと、すぐさま口をきつく結んで、左手首のまだ綺麗な部分に力任せに剃刀の刃を押し当てた。まだ右手を動かしてもいけないのに、たったそれだけで皮膚に裂け目が入ったのを知覚した。

今度こそ、躊躇わなかった。私は息を吐く代わりに奥歯を噛み締めて、剃刀の刃の角を突き立てる風に、思い切り右手を引いた。

それは、表皮や真皮を切り裂くと言うよりも、手首の中身を抉り取っていると云った方が相応しそうな感覚だった。ただ、幸いなことに、痛みはほとんど感じなかった。

わざわざ灯りを点けて確かめる手間など要らない、瞬間的に全身を包み込むように溢れ出した色は、はつきりとしていた。

気付いたら剃刀は右手になくて、だけどその手が反射的に左手を押さえようとする寸前、我に返った私は思わず叫びそうになった衝動を辛うじて堪え、それから両腕で体を抱き締め、目を閉じた。

一気に激しくなった心臓の動きが鼓膜にまで響いてきて、その音がする度に左腕の血管も脈打っているのを実感しながら、後何回、私の胸は鼓動を続けるのだろうかと頭の片隅で考えた。

十回か、二十回か、それとも百回くらい保つのだろうか。とは言え、仮に百回以上だったとしても、きつとあの数字には届かないだろう。

（一〇三七）

私は己の人生を終わらせるにきつかけとなった番号を思い出し、それを幾度となく頭の中で繰り返し返した。それはさながら、単一の事柄によって他の余計な思考を全て追いやりとうとするみたいに。もしもそれを中断してしまえば、すぐさま止めない恐怖感に呑み込まれてしまいそうで、惨めな言葉遊びめいているけれど、だからこそ私はそうなることを恐れてひたすら意識を数字で埋め尽くそうとし続けた。

だけど、そんな私の必死の抵抗を嘲笑うように、のんきな声は、それにぴったりの口調で言ってきた、あまりにも突然に。

「お前さあ、本当にこのまま死んで良いの？」

私は最初、それを単なる幻聴だと考えた。限界にまで追い詰められた心が、僅かでも苦しみを紛らわせようとして、そんなものを出現させたのだと。当然、目だって開けなかった。濁っているだろう湯の色を見たくなかったし。

しかし、その男の言葉は、単なる気のせいで済ますには少なからず生々しく、また何よりも酷すぎた。

「いやいや、哀れだねえ、マジで。って言うか、ここまで行くともう同情するどころか笑えるよな」

それから事実、軽薄そうな笑声が浴室内に反響した。真意を問うまでもない、声の主は明らかに無様な私を馬鹿にしていた。

「ああ、言つとくけど、今さら後悔したつて遅いからな」

その瞬間、私は自分でそうしようと考えたよりも早く、爆発的に胸の底から込み上げてきた悔しさに突き動かされるまま、目を開けて言い返していた。

「後悔なんかしないわよっ」

そしてさらにその後、あまりと言えば理解しがたい現実を前にして、「…え」と固まった。

私に無断で灯りを点けた上に、靴を履いたまま浴槽の縁に腰掛けて足を組む格好で、男はにやついた表情を顔に貼り付けながら、「よお」とこちらを見下ろしていた。安っぽいホストと売れないヴィジュアル系バンドのヴォーカルを足して二で割ったような全身黒づくめの服装は、同色の髪と瞳もあつて、妙にその男に似合っていた。

ただ、私は決して、見知らぬ男が突然に浴室の中へ現れていた事が原因で絶句したわけではなかった。だって、そんなある意味では何よりも危機的だと言えそうな状況ですら、所詮は確率論で説明出来る現象でしかないだろうから。

何と言うのが最も分かりやすく、また最も的確なのか、なかなか判断に困るものの、出来る限り簡潔に表現するとすれば、そこはきつと間違いなく私の家の浴室だった。実際、床に敷き詰められたタイルの色も、天井に備えられた電灯の光量も、浴槽の傍らにあるプラスチック製の小さな椅子と洗面器の汚れ具合まで、何もかもが見慣れたままのものだった。ただ、大量の湯気で霞んでしまったかのごとく、四方の壁が全く見えないほどの広さだけが、出鱈目だった。冷めた湯が想像と違って真っ赤に染まったりなどしていなかった事は、せめてもの救いなのだろうか。

わけが分からなかった。次から次へと新しい情報は入ってきていたはずなのに、頭の中まで真っ白になってしまっていた。唯一、生存本能が壊れて悲鳴も上げられない脳みそでも理解していたことは、私は今、この狂った世界で一人きりと言うことだった。

「おいおい、俺がいるだろ」

と、その時だ、急に話し掛けられて私はやはり何言も返せなかった。自分の思考に直に答えられたのだとようやく理解出来たのは、それからしばらくした後の事だった。

「こんなイケメンを前にして、その態度。お前って本気でつまらない人間だろ」

「あ、あなた、誰……」

「ほら、また。何だよそれ、つまらない質問だな」

「……………」

これ程まで立て続けに否定された事なんて、初めての経験だった、それも悪い意味で。啞然とする私を前に、男は軽薄そうな笑みを浮かべたまま「うわ、間抜けな面」。

多分、私にとって正しい反応は、ガチガチと歯の鳴るほどに震えたり、驚怖に青ざめた顔面に涙と汗をにじませたりする事であったのだろう。もしも男の気が変わって、そうでなくとも最初からそのつもりで、例えば私を力づくでどうにかしようと考えたら、それに抵抗する術なんて一つも持ち合わせていないのだから。大声を上げたって、浴室の外にまで届かないだろうし、仮に聞こえていた所で家には誰もいない。そんな環境を望んだのは、他でもない私自身だ。

だけど、私には奇妙な確信があった。つまり、この男は決してまともでないと言うことだ。勿論、それは決して彼が女に興味のないタイプだとか言う話ではなく。ストーカーも、押し込み強盗も、果ては追っ手を撒く為にたまたま手近な家のさらにお風呂場に逃げ込んできた全国指名手配犯でさえ、この世の物理法則を無視するなんて不可能なのに、眼前の存在は、こんなおかしな世界にありながら平然と嫌味を吐き出す余裕を持っている。

「まともじゃないのは、お前だって同じだろうが」

「……どういう意味よ」

「分からないのか。ふん、そんな程度だから受験にだって失敗するんだよ」

心臓を、棘の付いた万力で潰されたかと思った。

「おっと、これは失言、失言」。嫌らしく細められた男の目は、私が泣き出すのを期待している風だった。

気付けば私は全身が沸騰したみたいに声を上げていた、「あんたなんか何が――」。

しかし、そこまで言った直後、私は唐突に思い至ってまたしても声を失った。いや、そうじゃない、思い出してしまったからだ。

世界が正常だとか、異常だとか、薄ら笑いを浮かべた人でなしの正体とか、そんな事の前に、そもそも私の頭に血なんて上るはずがないのだと。

「気は済んだか」

一転してつまらなさそうに冷たくなった声に触れた途端、今度こそ一滴残らず血液を搾り取られたかと思った。

今頃になって、全身が粟立ち、激しく震え出した。

「って言うかさあ、とりあえず立てよ。いい加減、話もしづらいし」

「…あなた、本当に、誰なの」

「あのな、俺は『立て』って言ったんだぞ」

「……………」

こちらの問いかけを無視しての命令口調に、驚怖で麻痺しそうになっていた胸の内側で仄かな反発心が芽生えた。そんなこと出来るわけがないじゃないかと。無意識に手首へ視線を走らせると、大きく割けた皮膚が見えて、慌てて目を逸らした。

「さっさとしろって。それとも、俺が力づくで立たせてやろうか」。浴槽の縁に置かれていた手が、空中で私の髪を乱暴に掴むような動きを見せた。

正直な所、従うつもりなんて無かった。と言うよりも、体だつてとつくに思い通りにならなくなっていたはずだった。それなのに、男の仕草に対して反射的に目を瞑り、足に力を入れてしまったのは、自分でも信じられないことに、いとも容易く立ち上がってしまった。妨げになったものなんて、ずぶ濡れの服の重さくらいだ。

「…え」と、うって変わって男を下に見る格好になった私の口から、我知らず声が漏れた。そして直後に、さらなる驚きに声を失った。どんな理屈が働いたのか、浴槽の湯は跡形もなく消えていて、一瞬前までは確かに濡れていたはずの体も、服も、完全に乾ききっていた。手首の傷は大小関係なく全て、皮膚用の修正ペンでなぞったみたいに、妙に白っぽい膨らみで塞がれてしまっていた。にわかには理解しがたい現象の連続に、軽い頭痛はしていたけれど、立ちくらみなんて全くしていなかった。

「じゃ、行くか」

と、不意に男が腰を上げ、そんなことを言ってきた。再び私が見下ろされる形になった。

「あのな、そんなに身構えんなよ。別に、変な所に連れてくつもりはないからよ」

「…じゃあ、何処によ」

疑心と不信と不安と、とにかく負の要素を詰め込んだ視線を向けると、男はあっさりと答えてきた、「学校に決まってるだろ」と。

「学校？」

「お前が入試で落ちた高校だよ」

耳が壊れたかと思った。事実、耳鳴りみたいな音が聞こえてきて、空っぽになったはずの心臓が急速に鼓動の数を増し始めた。自分でも知らぬ内に、左の手首をぎゅつと掴んでいた。

でも、やはりと言うべきか、男はそんな私の変化に対して同情するどころか、表情を変

えることさえしなかった。こちらを見下ろす眼差しに、思いやりや気遣いの要素なんて欠片も浮かんでおらず、そんなものは期待するだけ無駄なのだと悟った。

やがて私は意を決すると、浅く二度、それからもう一度だけ深く呼吸して、言った。「一つだけ、ちゃんと教えて」

果たして男は「それに答えたらすぐに行くぞ」と言いたげに、軽く肩をすくめてから「どうぞ」と応えてきた。

私は三度、問うた、「あなたは、誰なの」と。

男は嫌らしく口の端を持ち上げると、重大な事実を告白するにはあまりにも気楽な口調で、こう言った。

「死に神だよ」

状況さえ違っていれば、それはただのつまらない冗談にしか成り得なかったはずなのに。

「偉いんだぜ、何たって『神様』だからな」

「……………」

嘲笑を薄く顔に貼り付けた男の態度に、何故だか私は、なるほどこいつは人間じゃないと、とても冷静に納得してしまっていた。



会場となった教室はろくに暖房も効いていなくて、やけに寒かった。

だから私は試験の始まる時間までを、ダツフル・コートを着たままで席に座って過ごしていた。丁寧に使われているのだろうとは分かるものの、そこそこに有名な私立の進学校にしては、ずいぶんと古びた椅子と机だった。

一列につき六席、三十六人分の座席が等間隔で並ぶ教室には、試験の説明開始を十分後に控えた時点で、中央辺りに位置する私を含めて三十五人の受験生が座っていて、それぞれがいかにも使い込まれている風な教科書や参考書、またノートなどを机の上に広げて真剣な表情を浮かべていた。

正直、ほとんどの人間が自分よりも賢そうで、模試での合格率A判定なんて本番では大した気休めにもなってくれなかった。と言うよりも、敢えてこの学校を受験しようとする人間ならば誰しもが同程度の成績を誇っている、そんな気がしてならなかった。結局、優秀は当日一回限りのテストの点数だけで決められるのだ。

緊張は、いつそ恐怖に近いものにまで膨らんでいた。

勝算ならばあった。落ち着いて試験に臨みさえすれば、おそらく合格するだろうと、理性は客観的に告げてくれていた。でも、それ以上に、今すぐに逃げ出してしまいたい、臆病な本性が叫んでいた。心の中は、受かりたいと言う気持ちよりも、失敗したらどうしようと言う不安で占められていた。

このままじゃ駄目だ。私は実際に立ち上がって駆け出す寸前で、そう思い直すと、とにかく手元の参考書の内容に集中しようとした。

一分、二分、やけにゆっくりと流れている時間を長いと感じている事こそ、まともに

脳みそが働いていない証拠だった。理科から数学、数学から社会、社会から英語、英語から国語へと次々に教科を変えてみた所で、一向に成果は上がらなかった。散漫な意識は、重要な単語や記号の意味そのものよりも、その上から蛍光ペンで引いた線の色の名前ばかりを思い出していた。

だけど、それでもまだ、私は何とか踏みとどまっていた。いや、そうじゃない。学校の教師や、塾の講師、友達に、両親、沢山の人の「頑張れよ、期待してるから」が、見えな鎖となって私の体を冷たい椅子に縛り付けているみたいだった。本音を言えば、そもそもどうして自分はこの学校に入りたいと考えたのか、そんなきっかけさえとくに分からなくなっていた。

ふと、私は知りたくなかった。そんな場合でない事は承知の上だったけれど、どうしてなのか、他の人間の動機を知って、それが己と同様に特別に重大なものでないかと確かめられたならばきっと、胸で渦巻いている不安だって些細なものに過ぎないと感じられる気がしたのだ。

私は頬杖を付く振りをして顔を隠すと、こっそりと周りを見渡してみた。

果たして、気分はやはり晴れなかった。それどころか、改めて真面目な顔つきで勉強をしているライバル達の様子を眺めて、自らの不甲斐なさをまたしても思い知らされただけだった。よくよく考えれば、他人の思考を読める能力を持っている人間が、テストでいち気後れするはずもないだろう。

けれど、ぐるりと円を描いていた私の視線が、最後にある席で止まった時、ほんの僅かであったものの、私は確かにそれまでとは異なる感情を抱いていた。

私の左隣、およそ残り四分足らずで試験管が現れるという頃になっても無人のそこは、教室の中で唯一、緊張感から解放されている場所であった。

逃げたのかな、私は何よりもまずそう思った。直後に、本当はどうせ風邪とかなんだらうなどと考えた。他の考えは浮かんでこなかった。

少しだけ、羨ましかった。勿論、例えばインフルエンザなどに罹って調子を崩していたとしても、多分、いや、きっと間違いなく、自分は薬や点滴で無理矢理に熱を下げてこの席に座っていただろうけれど、言い訳に困ることは無さそうだったからだ。大事な日に体調を整えられていなかった甘さは事実だから、「そんな体でよく頑張った」と褒めてくれる人がいなかったとしても、それでもおそらく多くの人は「そんな体なら仕方ないよ」と認めてくれるだろう。それに、そうであったならば私だって、最初から「どうせ無理だろうし」と、ある意味では割り切った気持ちで楽に試験を受けられて、逆にそれが功を奏していたかも知れないのだし。

しかし、いざ目の前にやって来てしまった現実とは、つまり受け入れざるを得ない現実で。しばらくの間、そのまま誰もいない空間を見つめていた私も、やがて再び自らの机の上に視線を戻すと、憂鬱な気持ちでコートを脱ぎ始めた。チャイムが鳴るまで、もう二分もなかった。

だが、その時だった。突然、静かな教室の扉が勢いよく開かれ、一人の男子生徒が慌ただしく駆け込んできた。コートもジャンパーも着ておらず、学生服だけの格好だというのに、彼は全く寒そうに見えなかった。

「やっべー、マジで。ギリだよ、ギリ」。荒い息づかいの隙間をそんな独り言で埋めな

がら、彼は迷う素振りもなく、唯一の空席へと歩いてきた。途中、いきなり現れた騒々しい邪魔者に、幾人かが顔を上げて険しい視線を送っていたものの、当人に気にした様子はいなかった。ただ、仄かに赤らんだ顔に浮かぶ、照れ笑いと苦笑の中間めいた表情を見ると、それは他人の迷惑を意に介さない身勝手な性格をしているからではなく、単に睨まれている事に気付いていないだけと言う感じがした。それはそれではた迷惑な鈍感さではあるのだろうけれど、男っぽい顔立ちの中にかすかに残る幼さのせいかな、何故だか、少なくとも私にとっては、そんなに悪い印象を抱くものでなかった。

そして彼は私の隣の席に辿り着くと、ようやく一安心とでも言う風に溜息を吐きながら椅子に腰を下ろして、「冷たっ」、即座に小さな悲鳴を漏らして立ち上がった。すると、またもや厳しい視線が集中して、彼も今度こそそれを自覚したのか、はたまた照れ隠しのつもりだったのかも知れないけれど、二、三度、周りに向かって、それから最後に傍らの私へと会釈をした。

吹き出しそうになりながら彼を見ていた私は、不意に目が合って、思わず反対方向にまで顔を動かしてしまった。その直後、頭の後ろで生まれたかすかな笑い声は、間違いなく彼のものだった。

一瞬にして、顔だけでなく全身が熱くなった。その上、間抜けな真似をしたのは明らかに向こうなのに、どうしてこちらが恥ずかしい思いをしなくてはならないのかと、至極真つ当な考えが浮かんできた途端、さらに体の温度が高くなった。とは言え、だからといって文句を言える根性なんて欠片も持ち合わせていなかったけれど。

自意識過剰だと自覚しつつも、下手に顔を動かすとまた彼と目を合わせてしまいそうで、出来る限りゆっくりと視線を机の上に戻した私は、そのまま先ほどから全く進んでいない参考書のページにそれを固定した。

と、そこでチャイムが鳴って、それと同時にスーツ姿の男の人が三人、ほとんど音もなく教室に入ってきた。緩みかけていた脳みそが、すぐさま緊張感を取り戻した。

「皆さん、おはようございます」

三人の内、教卓の所に立って見事なまでに愛想のない挨拶をした男は、ややあって教室の左右の端にそれぞれ残った二名が着いたのを確認すると、「それではさっそく試験の説明を始めさせて頂きますので、机の上は筆記用具と受験票だけにして下さい」と言った。淡々としたその目は、教室にいる受験生の全員を見渡しているようで、しかし誰のこともきちんとは見えていなさそうなものだった。

「今、皆さんにお配りしているものの内、大きい方の紙は、本日の予定と、試験に関する注意事項が記載されているものです。小さい方の紙は、皆さんの出席を確認する為のものですので、まずは配られた人からそこに名前と受験番号、自分の学校名を記載して下さい」事務的な口調で紡がれる言葉を背景に、参考書を片付けた私の机の上に、右側の男の人が二枚のプリントを置いた。そこで私は言われた通り、〈橋野千佳・一〇三七・瀬本中学〉と書いた。

二人の男が、また教室の端から順に、受験票の写真や番号を確認しながら用紙を回収していくのを待つ間、私はもう一方の紙に目を通していった。

試験途中での入退室は認められず、筆記用具を落とした場合は黙って手を挙げ、教科書や参考書などは机ではなくカバンの中にしまい、万が一にも不正が発覚した場合は問答無

用で不合格になった上に所属の中学校へ連絡が行く。その他にも、タイム・スケジュールを含めた幾つもの内容が書かれていて、だけどそれらはどれもみな当たり前前のものばかりで、私は早々に全てを読み終えてしまった。私の分の用紙が回収されるまで、まだ一列分の余裕があつて、仕方なく私は再度、試験の予定を確認しようとした。

「：あれ」

でも、その時だった。唐突に、隣の席から小さな呟きが聞こえてきた。そして私は、考える間もなく、ほとんど反射的に彼の方へ視線を向けていた。

「やっべ…。マジかよ」

それは決して、大げさな声や仕草でなく、それどころかむしろ注意していなければ容易く紛れてしまいそうなもので、私は自分でもどうしてそんなに気になつてしまうのか不思議だったのだけれど、机の上に眼鏡ケースじみた形の筆箱の中身を広げ、さらに手探りでカバンの中身を漁りだした彼の様子に、一体何をそんなに焦っているのか、それだけは妙にはつきりと理解する事が出来ていた。

数本のシャーペンと定規、替え芯のケースに、三色ボールペン、細長いものばかりが転がる中に、消しゴムの姿はなかった。

「君、早く書きなさい」

と、そこへ用紙の回収係の男がやって来た。男は、未だ空白の用紙を指さし、彼に向かつて厳しい眼差しを浮かべていた。

その瞬間、「あ、でも」と、彼は確かに何言かを伝えようとした。

しかしそれが成されるよりも、教卓から「そこ」と硬い声が飛んできて、彼を黙らせる方が先だった。一斉に集中した視線の中には、「またかよ」と言いたげなものも多かった。

「何か疑問点でもありましたか」

言葉遣いこそ丁寧にそう問いかけてつても、教卓の男の瞳は「余計なことは何も言うな」と語っている風で、結局、その違和感を前にして彼が返せる言葉など限られていた。

「：あ、いや、何でもありません。すいません」

「そうですか。では、早く用紙に記入して下さい」

彼が教卓の男に言われるまま急いで用紙にシャーペンを走らせると、ほとんど間を置かずに、傍らの男が机の上からそれを回収して歩いていった。そうしてじきに全ての用紙が回収され、改めて説明が再開された。その間、二人の男は自分達の集めた紙と手持ちの書類を交互に見比べて、受験生の最終確認をしているようだった。他の生徒達は、おそらく中には彼の状況に気付いた者もいただろうに、誰も何も言わず、さっさと前を向いていた。だけど、それでも私は、密かに彼の観察を続けていた。諦めて帰るのか、いつそ開き直つて消しゴムを使わずに試験に臨むのか、それとも思い切つて男達に助けを請うてみるのか、はたまたまいつそ周囲に座る見知らぬ生徒に駄目もとで声を掛けるのか、次に彼がどんな行動を取るのか、興味があつた。ただ、それは多分、純粋な好奇心からだけと言うよりも、おそらくここに来て初めて見つけられた自分よりも劣つていそうな相手を眺めることで、少なからず不安を誤魔化そうとする卑屈な動機もあつたのだろうけれど。

でも、彼はそんなこちらの予想を、いともあつさりとは裏切つてくれた。

彼はそれぞれのシャーペンの後ろに付いている、何とも頼りない消しゴムを取り出すと、それを机に並べて、終わりだった。その顔には最早、不安や緊張の気配など見られず、そ

れどころかいっそ開き直っている風な雰囲気さえ漂っていた。小指の先ほどの消しゴムの数は、たった三個しかなかった。

私は、正直に言うのと、呆れてしまった。まさか、そんな程度で今日一日を乗り切れるつもりなのだろうか。いや、もしかすると休憩時間などに同じ中学校の生徒でも捜して用意しようと考えているのかも知れないけれど、もしも見つけられなければ、どうする気なのか。購買や学食を使えない事は、あらかじめ送られてきていたプリントに書かれてあつたはずなのに。

しかし彼は、端から見ている分には、本気らしかった。むしろ、諦めることも、媚びることも、無視することもせず、ある意味では私よりも堂々としている態度に、逆にこちらの方が失敗をしてしまったみたいない気分にはさせられた。

やがて全ての説明が終了し、約十分後に最初の教科である国語の試験が開始される事を告げて三人の男達が教室を後にしてからも、私はずっと横目で彼を見ていた。

彼はやはり、問題はもう完全に解決したとばかりに、まるで動揺していなかった。国語は、特に記述の多い科目だと言うのにだ。

そして私は、気付いた時にはもうすでに、自ら彼に声を掛けていた。

「：あの」

「え？」

「その、消しゴム」と口からこぼれたくらいで、我に返った。自分は一体、何をしているのかと。

対して彼は、先に声を掛けておきながらいきなり黙り込んでしまった私の失礼さに、僅かに戸惑っている風ではあったけれど、ほんの数秒後には、「ああ、うん。そうなんだ。ちよつと、忘れちゃったみたいで」と応えてきた。

気恥ずかしそうな笑みと、目が合った。

私は、即座に顔を背けたい衝動に駆られながらも、寸前で言葉を紡いでいた。

「：あの、もし良かったら、だけど」

我ながら大胆な真似をしていると分かっていたし、そもそもわざわざライバルを助けるなんて馬鹿げた行為だと思っていたにもかかわらず、どうしてなのか、私は小さな革製の筆箱から予備として持ってきていた新品の消しゴムを取り出し、差し出していた。薄いビニールに包まれたままの、愛嬌も洒落つ気もない、いかにも文房具然とした地味なその姿に、どうせならもつと可愛らしいものを選んでおけば良かったと、急に後悔じみた感情が湧いてきたけれど、手を引つ込めることはしなかった。

沈黙の中をひたすら耐えるのは、わけも分からず話し掛けるよりも一層に気力を必要とする行いだつた。

だから、なのだろう。やがて彼がこちらへと手を伸ばし、少なからず戸惑っていることは明らかだつたものの、それでも確かに「ありがとう」と笑ってきた時、私はきつとやつとこの状況から解放されると思つて、心から安堵したのだ。他の要因なんて、少なくとも私の頭では考えられなかった。

それから私は消しゴムを渡すやいなや、すぐさま自分の机の上に顔を戻し、急いで慣用句とことわざの載っている手帳サイズの参考書をカバンから引つ張り出した。五十音順に並ぶ様々な言葉やその意味は、どれ一つとしてまともに頭に入ってくれなかったけれど、

心臓がそろそろ危ないくらい激しく暴れている中で、気を抜けば脳裏に再現されそうになる笑顔を辛うじて防ぐ助けにはなってくれていた。

いよいよ最初の試験が始まる寸前、たった一度だけ、ちらりと隣を窺ってみた時、彼もまた最後の追い込みとばかりに、酷くよれよれの参考書を、恐ろしく真剣な眼差しで見つめていた。



昼休みも半ばを過ぎた頃、校舎の中も外も関係なく楽しげな雰囲気満ちている学校の様子を、うって変わって閑散とした屋上から眺めていた私は、改めて自分が余所者である事実を思い知らされていた。

「良いねえ、青春だねえ。俺も一度くらい高校生とかやってみたいよな」

傍らでは、ふざけた死に神が、あろう事か屋上を囲むフェンスのさらに外側に立って、コンクリートの縁を爪先立ちで歩いている。ふと、そのまま落ちれば、この男は死ぬのだろうかと考えた。

「死なねえよ」

「そうでしょうね」

気楽な調子で心を読まれるのにも、いい加減に慣れつつあった。

「って言うか、お前らにも分かりやすいように『死に神』なんて名乗ってるだけで、俺達には『死ぬ』って概念が無いからな」

「だったら、生きてもないのね」

自分で思っていた以上に冷たく吐き出してしまった言葉にも、死に神の口調は変わらなかった。「そうだな。俺達はただ、『存在している』ってだけさ」。それから彼はフェンス越しに私の前に立ち、「お前らが気付いていないだけで、俺達はいつでも何処にだって、存在してるんだ」。

死に神は、確かに笑っていたけれど、どうしてなのか私はその瞳から目を逸らしてしまっ

た。「：それって、虚しくならないの?」。そして私は、気付けば嫌味なくらいに晴れた空に視線を向けたまま、そんなことを尋ねていた。

「いや、全く」、返ってきた答は、あっけらかんとしていた。

「お前らに気付かれようが、気付かれなろうが、俺の仕事、つまりは存在意義に変化なんて無いからな」

「でも」

「自分の価値を、他人からの言葉や世間的な評価でしか決められない奴には、分からないかも知れないけどな」

：何も、言えなかった。本心では否定したかったのに、私の口は馬鹿みたいに半開きの状態で、固まっていた。

すると、ややあって死に神はつまらなさそうに鼻を鳴らして、「まあ、何だって良いさ。」

詰まる所、俺はより良質な人間の魂を集められさえすれば、後のことはどうだって構わないんだからな」。

皮肉たつぷりの言い回しは、彼が本当に私個人に対する興味など持っていない証拠みたいだった。

「さて、そろそろ来る頃かな」

と、急に死に神がそんなことを言い出して、私はハッとした。ここに来た理由を思い出したのだ。

「…本当に来るの？他に誰も来てないような場所なのに」

「多分な。あいつはいつも決まって、昼休みにここを訪れるから。それに、その為になんかわざわざ、他の生徒の意識から『屋上に行く』って発想を消してるんだし」

「それって、人間を操ってるって事？」

「ちよいと違うな。俺がやったのは、例えば人間の目の前に『好きなカードを一枚引いてくれ』って差し出されているトランプの束の中から、そいつに気付かれないようにあらかじめ一枚を抜き取ってしまう事さ。最終的に、残ったトランプの中からどれを選ぶかは、その人間の自由意思によってのみ決まる」

「でも、それって結局は同じ事じゃないの。だって、三枚のトランプの内、二つを消してしまえば、後はもう一枚しか残ってないじゃない」

「まあ、言葉にしちまえばその通りだけどな、そう簡単にはいかねえんだよ。って言うか、そんな思い通りに人間を操作出来るんなら、こんな回りくどい真似なんかせずさ、さっさとそこら辺にいる連中を殺して魂を持っていくさ」

「……………」

「基本的に、俺達の存在を認識していない人間に対して、俺達の出来る事の範囲は狭いんだ。逆に言えば、俺達の存在を認識して、またその目的に同意している人間になら、相応の力を使えるがな」

「…一つ、思ったんだけど」

「何だよ」

「それじゃあ、今の私って、もしかして操られてるの？」

果たして死に神はにやりと口元を歪めて、「いいや」と首を横に振った。「とっくに説明はしただろう。確かに、提案したのは俺の方だが、それでも拒絶しなかったのは、お前の意思だ」。

きゆうつと、心臓が私だけに聞こえる音を立てて小さくなった。そのくせ、鼓動はびつくりするほどに速かった。

その時だった。「お、来たようだぜ」。唐突に死に神が声を上げて、私は反射的に振り返った。

屋上の真ん中辺りにある入り口は、丁度私達のいる位置からでは死角になっていて見ることが出来ないけれど、扉の開かれた音ははっきりと届いてきた。

「うわ、すげえ。誰もいないって、珍しいな」。たった一度、ほんの短い会話を交わしたきりのはずなのに、その声は不思議と私の記憶にぴたりとはまっていた。

足音が、徐々にこちらへ近付いて来るに連れ、鼓膜の内側を叩く血流の音も大きくなっていった。

「え…」

そうして遂に、彼が私の前に現れた時、私は呆然と立ち尽くしている彼に対して、一体どんな表情を見せられていたのだろうか。正直、自分ではまるで分かっていなかったけれど、背後で死に神が押し殺す風に笑っていたから、おそらくきつと間抜けな状態を晒していたのだろう。ましてや、「嘘だろ…」と、驚きで顔を染めた彼がまた一歩、こちらへと近付いて来た時には。

「…やっと、会えた」

ぼつりと彼の口から漏れた呟きの、意味を理解した途端、私は慌てて顔を背けていた。そうでもしなければ、血管が破裂して死ぬと思った。

Yシャツにネクタイ、チェック柄の乳白色のズボンと言った制服姿は、あの日の彼とずいぶん違う印象を抱かせる格好だったけれど、視線を逸らす寸前で見てしまった表情だけは、全く変わっていないかった。

あの日、私に「ありがとう」と言ってきた彼の姿が、瞬時に脳裏で再現されていた。

「もう無理なんじゃないかって、思ってたんだ」。私の耳に、穏やかな声が届いてきた。「あれから、君は休憩時間中もずっと勉強をしていたし、テストが終わったら急いで帰ったから、ちゃんとお礼も言えなくて」

私は逃げ出さずに聞いているだけで精一杯で、何かを答えるなんて不可能だった。

「合格発表の時にも朝から学校に来て搜したんだけど、人が多すぎて見つけられなくてさ。それで、その、とりあえず先に発表だけでも思ってた…。あれ、って言うか、どうして…」

だけど、そこで急に彼の歯切れが悪くなった。そして私には、その理由が分かってしまった。全身の血が、突如としてどこかに消えてしまったみたいになった。

試験当日、席は受験番号順に並んでいたのだ。相手の座っている位置と、己の受験番号を知っていれば、後は簡単な計算で導き出せる。

静かになってしまった彼に、ゆっくりと視線を戻せば、今度は彼の方が目を逸らしていた、気まずそうに。

何言か発しなればと思っただのに、喉は全ての水分を失ってしまったかのごとく、かすれた音を二欠片ほど生み出せただけだった。

「いやいや、盛り上がりてる所、悪いんだけどさ」

沈黙を破ったのは、場違いに陽気な声だった。

先ほどとは別種の驚きを顔に浮かべた彼に向かつて、空気を読まない死に神は、いかにも芝居がかった仕草で「どうも、初めまして」と頭を垂れた。

「あ、どうも…」。真面目なのか、それとも言い方は悪いけれど少し馬鹿なのか、彼はわけが分からないうるという表情のままでお辞儀を返していた。私はそんな二人のやりとりを啞然と眺めていた。

「君を待っていたんだよ、嶋井尚仁くんしまいひさと」

「いや、って言うか、あんたは誰ですか」

「ああ、俺は死に神」

「…は？」

彼の反応はもつともだ。誰だって、さらりとそんな単語を告げられたら、自身の耳と相

手の正気を疑ってしまうだろう。からかっているのかと怒り出さなかったただけまだマシだ。しかし、死に神本人はそれを面倒だと思っていないらしく、「証拠とか見たい?」。

「まあ…。出来れば…」

その瞬間だった。私には、それがいつ成されたのかすら分からなかった。状況を理解したのだって、いきなり彼の悲鳴が鼓膜を震わせてきた後だ。

「そんなに騒ぐなって。そっちが証拠を見たいって言ったんだろ」

どういう理屈であれば数メートルの距離を、しかも間にフェンスを挟んでいるにも関わらず、ほんの刹那で飛び越えてしまえるのか。パニックに陥って今にも屋上の縁から足を滑らせてしまいそうな彼の腰のベルトを、死に神はぞんざいに掴んで「暴れるとマジで落ちるぞ?」。

確かに、死に神の腕は魔法でも使っているみたいに、彼の体を完全に固定していたけれど、同時にその光景は、今にも背中を押して突き落とそうとしている風にも見えて、また彼にとってはまさしくそんな感じなのだろう。心の底から、せめて後もうちょっと親切な説明があっても良いだろうにと思った。

とは言え、その方法がこれ以上ないほどに効果的であったこともどうやら確かで、私に次にまばたきをした時、再び元の位置に戻っていた彼は、地面に両手と膝を突いて荒い息を吐いていた。

「だ、大丈夫?」。気付けば私は彼に駆け寄って跪いていた。

フェンスの向こうから、「仲良きことは素晴らしきかな」と軽薄な讃辞が響いてきた。

「ふざけないでよ」。小刻みに震えている彼の背中を見た途端、口が勝手に怒鳴っていた。

「ふざけちゃいけないさ。むしろ真面目だよ。ほら、仕事は早い方が良いだろ」

「その態度がふざけてるのよっ」

「だが、その彼には、ちゃんと伝わったぜ」

「え…」

こちらの激情を平然と受け流す死に神の態度に、慌てて彼を見下ろすと、なるほど、彼は体勢こそそのままであったものの、確かに死に神の視線を真っ向から受け止めていた。

「あ、ちよつと…」

「…うん、もう、大丈夫だから」

そして彼は止めようとする私に、かすかに引きつっている笑みを見せると、ゆっくりとだけれど自らの足で立ち上がった。驚いて彼を見上げるしか出来なかった私の耳に、「さすが男の子。そりゃ、ここは頑張るしかないか」、「…そう言うわけじゃ、ないけど」と、二人のやりとりが聞こえていた。

「…それで、その死に神が俺に何の用だよ」

「実は、ちよつと話を聞いて貰いたくて」

「話って—」

「その彼女、自殺したんだ、ついさつき」

時間が、凍った。私は立ち上がるどころか、最早、彼を見つめていることすら出来なかった。ややあつて再び動き出した世界の中で、彼が唾を飲み込む音がした。

死に神が、淡々と語り始めた、こんな時だけ丁寧な。

「彼女さあ、君も知っての通り、この学校に落ちちゃったんだよね。それで、そのショックがあまりにも大きくてさ、部屋に引きこもるようになったよ。その挙げ句に風呂場で手首を切ったんだよ。ほら、何なら見てみな、傷があるから」

咄嗟に左手首を右手で覆った。頭の上から、死に神の笑声が降ってきた。

「でもさ、世の中って面白いよな。そうは思わねえか」

「どういう、意味っすか」。押し殺す風な彼の声音は、向けられているのが私でないに分かっていても、恐ろしいくらいだった。

「この女が勝手に平常心を失って、試験に失敗したのは、自業自得。君が必死に試験を受けて、何とか合格したのも、君自身の成果。ただ、その両者の差が、絶妙だった」

「…差？」

「君さ、知らないだろうけど、実は合格ぎりぎりだったんだよ。実際、合格した人間の中で最下位の点数だったんだから。逆に、そいつは、不合格者の中では一番だった。まさしく紙一重ってやつだよな」

「それって…」

「君がいなければ、もしくはもうちょっとでも悪い点数を取っていれば、受かっていたのはその女だったって事さ」

彼が息を呑んだ。私は息を殺してうずくまっていた。

「皮肉な話だよな、マジで。この女もさ、君に消しゴムをやったりしなけりゃ、受かっていただろうに」

「そんな」

「いやいや勘違いすんなよ、責めてるんじゃないやねって。むしろ感心してんだよ。だって、最初はそんなに受かるつもりなんて無かったんだもん。それなのに土壇場になって急にやる気を出して、その結果が合格なんて、立派なもんだ」

「俺は、ただ…」

「反面、そいつはまともにやってりゃ、消しゴム云々に関係なく受かっていただろうに、一人でパニックって不合格。しかもさ、何が笑えるって、そもそも平常心を失った理由ってのが—」

「止めてっ」

限界だった。それ以上は耐えられなかった。

「…止めて、もう。お願いだから」

私は彼の方を見ないようにしてそっと立ち上がり、離れた。彼が小さく「あの」と言うてきたけれど、応えることはしなかった。

一転して静まりかえった中、けれど私の耳には、死に神の声が蘇っていた。

「どうする。お前が望むなら、あの男を代わりに連れて行っても良いんだぜ。どっちにしても、魂の数は変わらないんだからな。なに、簡単な話さ。要は、ちよっとだけ過去を変えちゃうんだよ。大幅に歴史をいじくる事は他の人間にも影響が出るから無理だとしても、もしも奴の方にこの提案を受け入れさせられれば、少なくともお前ら二人を入れ替える程度なら可能だろうさ。そうすれば、本当は受かっていたのはお前の方で、落ちていたのはあっちの方だって事になるぜ。ショックを受けるのも、あの男の方さ」

自宅の風呂場から屋上へとやって来て、何よりも先にその話をされた時、私は「馬鹿馬

鹿しい」と返したのだ。「そんなこと、出来るわけない」と。

：でも、私はそう言いながらも、その場から動こうとしなかった。それはただ単に、そんな独善的な陰謀に乗ったからではなく、純粹に彼に一目会ってみるのも良いかも知れないと思った事が理由のはずだったけれど……果たして実際はどうであったのか。

今になっても、分からなかった。分からないと言うことこそが、つまり真実を表しているとも思えたけれど、認めたくなかった。自分がそんな身勝手に冷酷な人間だなんて、受け入れられるはずがなかった。

「何を今さら」

だけど、私の心の内側を見透かす死に神は、沈黙を引き裂いて容赦なく告げてきた。

「自殺なんて真似をしてる時点で、十分すぎるくらいに身勝手だろうが」

返せる言葉なんて、一つも思い付かなかった。それが最も卑怯な行為だと分かっていたのに。

「お前の行為がどれくらい周りに迷惑を掛けて、傷つけるのか、真剣に理解もせずに、自分に都合良く悩む振りだけしたらさっさと――」

「もう止めろよ」

だからこそ、驚いた、彼が私なんかを庇ってくれた事に。

呆然と彼を見ると、私の視線を感じたのか、彼は静かに笑みを浮かべてきた。どうしてと問うたつもりだったけれど、彼は気付かず死に神の方を向いてしまった。

「もう良いだろ。この人は、そんなに酷い人じゃ無いよ」

「：おいおい、正気か。こっちから話しておいて何だけどよ、要するに、お前の合格を取り消して、代わりにこの女が受かっていた事にしてくれって言ってるんだぜ」

「分かってるよ」

「何だそれ、受け入れるって事か？」

嘲るように語尾を上げた死に神に対して、彼は即座に応えて見せた。「ああ」と。信じられなかった。

「うわっ、マジかこいつ。こんな赤の他人の為に、自分の成果を手放しやがったぜ」
大げさに驚く死に神に背を向けて、彼は私を見つめてきた。

「元々さ、ただの記念受験のつもりだったんだ。それに、そうでなくたって、あの時に消しゴムを貸して貰っていかなかったら、どっちにしる駄目だったろうから」

それに対して即座に返したのは、私でなく死に神だった。

「そいつは、嘘だな」

彼の言葉が止まった。

「まあ、お前が落ちる予定だったのは、間違いないんだろうさ。でも、それは記念受験のつもりだったわけでも、たまたま消しゴムが無かったからでもない。だって、お前は、最初からわざと消しゴムを家に置いていったんだから」

「え……」

我知らず声が漏れていた。彼はこちらを向いたまま、困ったように笑っていた。

「言い訳だよ」

「……言い訳？」

「この男はな、ずっと成績が伸び悩んでいたんだよ。それで、いよいよ試験当日を迎えち

まっても、やっぱり真面目にテストを受けた所で合格する自信なんざ欠片も湧いてこなくてな。結局、最初っから落ちる気でいたのさ。しかしまあ、そうは言うものの、内心では葛藤もあつたりしてな。だから、自分自身に対する言い訳の為に、敢えて不利な状況を作つて不運な男になりきつていたんだよ。いつそ、役者でも目指した方が良かったんじゃないかねか」

「そんな…」

言葉を失つた私に対して、彼は僅かに躊躇う素振りを見せた後で、「そんなわけだからさ、気にしなくて良いよ」と言ってきた。「むしろ、謝らないといけないのは、俺の方だしさ」。

そして彼は真っ直ぐに、頭を下げてきた。「傷つけて、ごめん」と。

私は、そんな彼に、何か、一言でも良いから、とにかく答えなければならぬと――。

「これで同意が揃つたな。条件が整つたな。それじゃ、さっそくやるか」

喜々とした死に神の声が、私の思考に割り込んできた。

ちよつと待って、と言おうとした、死に神に向かつて。けれど、実際には、声を出せなかった。

裏切られたと、彼に対して明確な反感を抱いたわけでは決してなかった。だけど同時に、心の片隅に、卑しい考えが生まれていたのも事実だった。

どうせ、最初から受かるつもりが無かつたというのなら、そんないい加減な気持ちで試験に臨んでいたのなら、だったら、私と代わつてくれても良いじゃない。

…でも、私はこの時、すぐに気付いておくべきだったのだ。本当に、死に神の言葉通り、彼の中には不誠実な想いしか存在していなかったのか、その真実に。

そんなはずがないのに。だって、もしも彼が、不合格でも全く傷つかず、その結果を突きつけられても平気な顔をしていられた人間であつたとすれば、そもそも死に神がこんな取引を持ちかけるわけがなかつたから。

死に神が自ら言っていたのだ。目的は、魂を持つていくことだと。

「今さら遅いんだよ」

だけど、私がようやくやくそれに思い至つた時にはもうすでに、薄く笑つた死に神の手が、彼の胸に触れていた。

止める間もなく、私の目の前で、死に神の手が彼の体の中へと吸い込まれ、その体が一度だけ跳ねるように震えた。

そしてそれきり、彼はその場で凍りついてしまったかのごとく、動かなくなつた。彼は、私が大切な場面で己を保てなくなるほどに心惹かれてしまった笑みを浮かべたまま、固まっていた。

遅ればせながら、私は悲鳴を上げた。

「うるせえな。お前が望んだ事だろうが」。鬱陶しそうに顔をしかめた死に神が、今度はこちらへと歩いてくる。私の足は、逃げ出すことも、うづくまることも叶わず、ただ体をその場に固定する為だけのものになっていた。「逃がすかよ」と、死に神が笑つた。

「お願い…。お願いだから…」

「何だよ、急に。つて言うか、何で泣いてんの。むしろ喜べよ」

「そんなこと、出来るわけ…」

「どうして」

あまりと言えば静かな問いかけに、私は思わず嗚咽を呑み込んだ。

死に神は冷めた眼差しで、「彼を死なせるくらいなら自分が？はっ、止せ止せ、今さら偽善者ぶるのはよ」。

死に神が遂に、軽く手を伸ばせば私に届く場所までやって来た。

「それにさ、こっちにしてみても、お前よりもこの男の魂の方が良いんだわ」。死に神が、唇が触れそうなほどに顔を近付けて、頬を歪めた。「言っただろ、『より良質な魂を集める』って。同じ自殺者の魂でも、お前みたいな卑怯者や、独りよがりの犯罪者なんかのもんより、こんな奴の魂の方がまだ少しは価値があるんだよ」。

そして死に神は、一言も返せない私に満足したのか、体を離して「お前だって、どうせ喰うなら、一皿百円の回転寿司のトロよりも、五百円の特別キャンペーン用のトロの方が良いだろ。まあ、時価何千円の天然高級本マグロには敵わないとしてもさ」と言っていて、嗤った。

…悔しくて、悲しくて、申し訳なくて、こんな奴に涙を見せなくなかったのに、私はどうしても感情を抑えることが出来なかった。

「お前は知らねえだろうがな、こいつはこいつで、本気だったんだよ。確かに、あの日あの瞬間まで、中途半端なヘタレ野郎に過ぎなかったけどな。それでも、いざテストが始まるって、その頃には、ある意味ではお前よりもっと真剣に、自分の意思だけで、この学校に受かりたいと思っていたのさ。魂も、見違えるほどに。どうしてだか、分かるか」

「それは…」

「分からないよな。そんなんだから、お前は駄目だったんだよ」

「……………」

「簡単な話さ。このお人好しはな、まさかお前が落ちるなんて、これっぽっちも考えちゃいなかったのさ」

「…え」

「だから必死だったんだよ。どうしても、お前にもう一度ちゃんと会いたかったから。だからその為に、絶対に受かりたかったのさ。な、見かけに寄らず、結構な情熱家だろ」

「そんな…。だって、そんな理由だけで…」

「たった一個の消しゴム。他の人間にとっちゃ、取るに足らない些末なものだろうさ。だがな、少なくとも世界中でこいつにとっただけは、それはまさしく人生を変えてしまうほどの、いや、人生を変えてしまいたいと願えるほどのきっかけだったんだよ」

「……………」

「人生の転機なんて、案外そんな一瞬に訪れるもんなのさ。まあ、確かに少しばかり単純な男だとは思うけどな」

そう言っただけで神は、「男はちよつと馬鹿なくらいで丁度良いしな」と軽く鼻を鳴らした。

私はいつしか、泣くことも忘れて立ち尽くしていた。

それはきつと、もしも偽りの話で無いのであれば、間違いなく私にとってこの上なく喜ばしい事実だった。だからこそ、私は心の底から、後悔した。

「心配すんな。どうせ、お前は何もかも忘れるんだから。罪の意識だって、綺麗さっぱり

消えてくれるさ」

嫌だと思った。今さら虫が良すぎる願望だろうけれど、彼を忘れたくない、この気持ちを失いたくないと想った。そして同時に、私自身も死にたくなかった。

だけど、死に神は、そんなこちらの胸中を分かっていたはずなのに、ほんの束の間でさえ躊躇なんてしてくれなかった。

服の上からでも伝わってくる、冷たい死に神の手が、まるで私に同化するみたいに、音もなく体の中へと入ってきた。精神的な嫌悪感を除けば、肉体的な痛みや不快感など無かったのに、どうしてか心臓を掴まれたのだと分かった。

「それじゃあな。念願の高校生活、楽しめよ」

そして私は、そんな嫌味でしかない言葉に反論する事さえ出来ず、意識を失った。死に神の顔は最後の最後まで、やはり彼らしいものだった。



せっかく受験に成功し、晴れて女子高生となった私だったけれど、正直に言えば、私は不思議な物足りなさを感じていた。

勿論、中学校時代に比べると、色んな変化があった。例えば、一気に行動範囲と自由の幅が広がって、しかも通学定期のおかげもあり、休日の電車での遠出もずいぶんと楽になった。一方で、さすが進学校とでも言うべきか、授業の内容は相応に難しく、夏休み前に受けた初めての中間試験はなかなか手強いものだった。また、在籍する生徒の数だつて倍以上で、その中で気の合う友達も出来て、秋の体育祭の時には彼女たちと一緒にどの男子が好きなのか、グラウンドを駆け回る名前も知らない選手を勝手に応援して盛り上がりたりもした。

間違いなく、充実した楽しい毎日だった。時には失敗したり、凹んだりする事だつてあるとしても、総じて言えば上々な高校生活を送っていた。しかし、それでもどうしてなのか、完全に満たされずにいたのも事実だった。

とは言え、ある意味では、当然だとも思っていた。だって、この世の中で、己の人生に百パーセント満足している人なんて、おそらく滅多にいないだろうから。だから、自分がそんな気持ちになるのも、詮無いことだと考えていた。

ただ、そんな気持ちになった時に、たびたび思い出してしまふ事はあった。

あの入学試験の日、寒い教室でほんの短い間だけ接した、名前も知らない男の子。消しゴムを忘れてしまつていて、私が我ながら思いきったことをしたと今でも感心するが予備の消しゴムを差し出して、それに彼は「ありがとう」と笑って見せた。

あの彼が、この学校にいないことは、すでに知っていた。合格発表当日、おそらく彼のものだろうと思えた受験番号は、掲示板の上に存在せず。また、もしかしたらと一年生のクラスを全て回って、新入生の顔を確認したけれど、あの笑みに再び出会えることは無かった。

それはきつと、仕方のない話だった。そもそも、私にしたつてあの日の試験はほとんど集中出来ずに、実際に掲示板に自分の番号を見つけるまで、受かっているのかどうか不安

だったのだから。試験の終了後、あまりのショックに泣き出してしまいそうになって、急いで家に帰った事は今でも忘れられない。だからこそ、彼が落ちてしまった事もまた、残念であるけれど、受け入れなければならぬ現実なのだ。そして私は、それをちゃんと理解していた、はずだった。

やがて私は、冬を越し、春を迎え、いよいよ二年に進級した。その頃には、胸の隅に空いている穴こそそのままであつたけれど、薄膜のように心に広がる日々の楽しさでその表面を覆い隠してしまう技術も身につけていて、私はもういちいち感傷に浸ることもほとんどしなくなっていた。

新しく転入して来た生徒がいるらしいと噂を聞いたのは、そんな二年生としての日々が始まって間もなくだった。

私は最初、何とも物好きな人間がいるものだと思われてしまった。確かに、私の学校は進学校で、授業内容のレベルも、有名大学への進学率もそこそこに高い。しかしながら、それは言い換えると、そう簡単に余所の学校から転校なんてして来られないと言うことなのだ。これはあくまでも噂だけれど、この学校の転入試験に合格する事は、いっそ大学入試のセンター試験で全科目九割の点数を取るよりも難しいらしい。だとすれば、すでにそれだけの實力を持っている人間が、どうしてわざわざ別の学校に移る必要があるのか。そんな面倒な真似をする暇があるのなら、質の良い予備校にでも入った方が遙かに合理的だろう。

でも、そんな考えは、その転校生が誰かを知った途端に霧散してしまっていた。

ある日の昼休み、突然に私の教室を尋ねてきた男子生徒は、私を見つけると開口一番にこう言った、「…やつと、会えた」と。

私はと言えば、周囲からの好奇の視線に恥ずかしいと感じる余裕さえなく、呆然とその笑顔を見返すことしかできなかった。忘れてたりなんて、していなかった。

そして私は、ひとまずそのまま彼と一緒に屋上へと向かった。幸いにして、もうそろそろ本鈴が鳴ろうかと言う時に、残っている生徒はいなかった。授業に遅刻してしまうと分かっていたけれど、構わなかった。奇妙な既視感が、私の動悸をさらに加速させていた。

「…あの、どうして」

こちらの問いかけに対して、彼はしばらく迷っている風であつたけれど、遂に答えてきた、「君に、どうしても会いたかったから」と。

心臓が、三倍くらいに膨れあがった気がした。

「これのお礼をさ、どうしても言いたかったんだ」

彼がズボンのポケットから、角の丸くなった消しゴムを取り出した。派手さも洒落つ気もない、何処にでもありそうな地味な消しゴムだった。

「で、でも…。お礼って言っても、その…」

「試験の結果は関係なくてさ」と、不意に彼が仄かに笑みの質を変化させた。それは、はにかんでいるようにも見えた。

「嬉しかったんだよ、本当に。それと同時に、情けなかった」

「情けない？」

「俺さ、あの時、君がこれをくれるまで、変に頑張つて失敗するよりも、さつさと諦めて平気な顔をしている方が格好良いとか、ちよつと思つててさ。だけど、そのくせ、すつぱ

りと諦めることもなかなか出来なくて。うじうじしてさ」

「……………」

「元々成績も微妙だったしね、そんなんだから、試験に落ちた事自体は当然と言えば当然なんだ。まあ、そうは言っても、実際はかなり凹んで、ちよつと真剣にやばい時もあつたんだけどさ。でも、俺の言いたいのは、そんなことじゃなくてさ」

と、そこで急に彼は言葉を切ると、それまでと一転してとても真面目な表情でこちらを見つめてきた。

正直、男子からそんなにまともに凝視される状況に慣れていなくて、目を逸らさずに視線を受け止め続けることは相当に気力を要する行為だったのだけれど、それでも私は懸命に耐えた。本鈴の音を聞きながら、左右の耳が、もの凄く熱くなっていると感じていた。

「これは本当に、俺の勝手な考えって言うか、それこそ君には関係ない話なんだけども。君からこれを受け取った瞬間、気障な言い方に聞こえるかも知れないけど、俺さ、分かった気がしたんだ」

「…それは、何を」

「可能性が残ってるのに、びびって逃げ出す方が、よっぽど格好悪いって事に。確かに結果は残念だったけどさ。それでも、その気持ちがあつたからこそ、受験の後も立ち直れたし、此処までだって来られたんだ」

それから彼はかすかに頬を赤くして、「やっぱ、気取ってるかな、俺？」。

私の答えなんて、決まっていた。

「…ううん、格好良いと、思う」

もの凄く恥ずかしかったし、体なんてもう今にも倒れてしまいそうだったけれど、どうしてかその言葉だけは素直に生まれていて。すると、それをちゃんと言えた事に感動したのか、いきなり涙が溢れそうになってきて。いやいや、さすがにここで泣くのは自分の方こそ格好悪いと焦ったりして。要するに、私はパニック寸前だった。ただ、それでも嫌な気分はしていなかった。だから、こんなのもたまには良いかと思っていた。

「でも、もしかして、たつたこれだけの為に、わざわざ転校してきたの？」

そして私は、彼との会話を自然に任せることにした。

彼は私の質問に、軽く苦笑してから、「まあ、男の意地みたいな部分も含めてね。周りには、散々『お前は馬鹿か』って呆れられたけどさ。親にもだいぶと我が儘を言ったし」。

「うん、悪いけど、私もそう思うよ」

「酷いな。こう見えても、実はかなり頑張ったのに」

「それは分かるんだけど」

「まあ、いいや。それに、どっちかって言うと、今はとりあえずそのままの方がいい気がするし」

私は彼の言葉に、どういう意味かと尋ねようとした。

けれど、それよりも先に、彼が口を開いてしまった。

私は、なるほど、彼は本当にこちらの予想を上回るくらい、根っからの馬鹿なんだと呆れてしまって、だけどそれ以上に嬉しすぎて、今度こそ涙を止めることが出来なかった。

「何て言うか、突然すぎるってか、自分でもうちよつとそちの都合とかタイミングとか考えろって思うんだけど、でも、再会出来たら、消しゴムのお礼と一緒に、どうしても

言いたい事があつて―」

私は彼の告白を聞きながら、真つ赤に染まった顔におかしさを感じながら、いい歳をして子供みたいに泣きながら、それでもせめてその返事だけは、心からの笑顔で伝えたいと想っていた。

〈了〉